

ゲノムを活かす酪農の第一歩

# 「できない」を「できるかも」 に変える 10 のヒント

株式会社ファームノート  
マーケティング事業部

ゲノムを活かす酪農の第一歩

# 「できない」を「できるかも」 に変える 10 のヒント

## CONTENTS

P.3 はじめに

P.4 ① 経験と勘からのステップアップ

P.7 ② コストの捉え方

P.9 ③ データとの付き合い方

P.12 ④ 時間と手間の考え方

P.15 ⑤ 費用対効果の考え方

P.17 ⑥ 指標の活かし方

P.19 ⑦ 世代間の考え方

P.21 ⑧ 牛群の健康管理

P.22 ⑨ 情報共有とチーム活用

P.24 ⑩ 最初の一步

## はじめに

ゲノムと聞くと、「難しい」「一部の意欲の高い人の話」と思われる方も多いかもしれません。けれど、ゲノムとは、その生物の体を作るための“設計図”全体（すべての遺伝情報）を指します。

ここで、よく似た言葉との違いを「設計図」に例えて簡単に整理してみましょう。

- **DNA**: 設計図を構成する「素材」であり、遺伝情報を書き込む文字のようなものです。
- **遺伝子**: DNAの配列のうち、体の特定の部分（例: タンパク質）を作るための「個別の指示書」にあたります。
- **染色体**: この長いDNA（設計図）が、細胞の中にコンパクトに収納された「構造」（設計図をまとめた本棚のようなもの）です。
- **ゲノム**: そして、その生物が必要とする「すべての遺伝子（指示書）」を含む、設計図のワンセット全体を指します。

この設計図には、将来生み出す乳量の期待値や繁殖能力、病気へのかかりやすさなど、「勘では見えない部分」が書き込まれています。ゲノム検査は、その情報を読み解き、数値として活用するためのツールです。

この冊子は、これまでゲノムを「自分には関係ない」と思っていた方が「もしかして自分にも必要かもしれない」と感じられるように、現場の視点で10のヒントをまとめました。

## ① 経験と勘からのステップアップ

キーワード: 勘の裏付け／数値で「目に見える能力」へ

「結局は、育ててみないと分からない部分が多い」「血統や姿形を見れば、良い牛はだいたい分かる。」私たちがお会いする多くの牧場主様が、そうおっしゃいます。そして、私たちはその考えを尊重します。皆様が長年のご経験で培ってこられた、「匠の目」は、何物にも代えがたい素晴らしい財産であり、牧場経営の土台そのものだと考えているからです。

『マネーボール』という映画をご存知でしょうか。あの映画では、監督の長年の「経験」と、統計学の専門家が持ち込んだ「客観的なデータ」が融合することで、弱小チームが奇跡を起こしました。経験という揺るぎない土台があったからこそ、データが真価を発揮したのです。

ゲノム検査は、皆様の「匠の目」に取って代わるものでは、決してありません。むしろ、皆様がその目で感じ取った「こいつは良い牛になりそうだ」という貴重な“勘”が、本当に正しかったのかを客観的なデータで裏付けし、答え合わせをするためのツールです。

【できるかも！】「勘と経験」を、「揺るぎない確信」に変える

それではクイズです。この2頭の初産牛の写真から、遺伝能力が高い牛はどちらかわかりますか？ 分娩時期も乳房の張りもバラバラな中で、見た目だけで判断するのは、なかなか難しいのではないのでしょうか。



©2025 Farmnote Inc.

「Q. 遺伝能力(NM\$ ネットメリット)が高いのはどっち？」

正解は「左」です。皆様の「見立て」と、どのくらい一致していたでしょうか。多くの方が悩まれたように、見た目だけでは判断が難しいケースも確かに存在します。

ちなみに左の牛がNM\$ 154で、初産乳量が年間9,928kg出ていました。右の牛はNM\$ -251で、初産乳量は年間6,950kgでした。

さらに重要なのは、その後の結果です。この写真の牛たちを2年後に追跡調査したところ、遺伝能力(NM\$)が低いと評価された牛(右の牛)は、繁殖除外となり淘汰されていたのです。「見立て」や経験則では『なんとなく』としか掴めなかった将来性を、ゲノム検査は「牛の設計図」として明確に数値化していました。

「本当にそのデータは信頼できるのか？」という疑問もあるかと思います。このゲノムという指標は、アメリカの検査機関が保有する1億5,000万件以上という膨大な乳牛のデータと、世界中の生産者からの「この牛は実際に乳量が出た」「この牛は病気だった」という実際の成績を常に照合し、精度を高め続けているものです。

さらに、これは日本国内の私たちファームノートのデータでも証明されています。ゲノムの「NM\$ (ネットメリット)」上位25%の牛群と、下位25%の牛群とでは、年間に換算すると約12万円もの収益差(乳価換算)が生まれていることが確認されました。

## 「ビッグデータ」から導き出される確固たるエビデンス

「NM\$」の上位25%は下位25%の牛と比較すると日乳代が**最大328円**高まります。  
実成績は、初産牛の検定データを元に現状の乳価と照らし合わせて算出しております。

分割方法		全国	北海道
NM\$	上位25%	155.3	171.2
	下位25%	-426.5	-403.8
実成績 (初産_日乳代)	上位25%	3,834円	3,851円
	下位25%	3,506円	3,535円

全国で328円の差あり！  
年間約12万円の収益差

©2025 Farmnote Inc.

皆様の「勘と経験」という武器(土台)に、「ゲノム」という客観的なデータを掛け合わせる。それこそが、これからの牧場経営をさらに加速させる「両輪」となります。皆様の「勘」に「データ」という裏付けをすることで、あなたの判断は自信から「確信」へと変わります。これまで見えなかった遺伝的な要素を数値化し、「目に見える能力」へと変えていく。そんな第一歩を、今ここから始めてみませんか。

## ② コストの捉え方

キーワード: 費用ではなく、未来への投資

「ゲノム検査は高すぎる。1頭数千円もかけて、本当に元が取れるのか?」「今は牛舎の修繕や新しい機械の導入が優先だ」「なんとなく良さそうなのは分かるが、投資に見合うか確信が持てない」

コストに対するその感覚は、堅実な経営をされているからこそ当然です。しかし、もしその「費用」が、将来の「もっと大きな損失」を防ぎ、新たな利益を生み出す「投資」だとしたら、どうでしょうか。

【できるかも!】「コストが高くて無理」から「賢い先行投資だ」に変える

私たちがゲノム検査を「費用対効果が高い」とお伝えする理由は、単に「牛の能力が上がるから」だけではありません。むしろ、「目に見えない無駄なコスト」を削減できる点にあります。

1. 「なんとなく」後継牛を育てるコスト、計算したことはありますか?

「とりあえずメス牛は全部残しておこう」という場合、多くの牧場様が、実際の後継牛の数よりも多い頭数を育成しています。その結果、牛舎が満床になり、育てた牛を「初妊牛」として販売しているケースも少なくありません。

ある牧場様の例では、1頭の初妊牛を販売するまでに、預託費だけで約**42万7,000円**の経費がかかっていました。もし年間40頭を初妊牛として販売している場合、そのコストは約1,700万円にも上ります。これは自家育成であっても、飼料代や人件費、作業コストとして確実にかかっている費用です。

ゲノム検査は、子牛の段階で「将来、牧場に利益を残す牛か」を高精度で判断できます。つまり、「残さない牛」を早期に決めることで、この数年間にわたる莫大な育成コストを、まるごと削減できるのです。

2. キャッシュフローを劇的に改善します

「残さない牛」に、高値での販売が期待できる和牛受精卵を移植する戦略も可能になります。ここでの大きな違いは「キャッシュ化までの時間」です。

- 初妊牛販売：現金化まで約2年（610日）かかります。
- 和牛初生販売：現金化まで約2ヶ月（60日）で済みます。

初妊牛販売：現金化まで約2年（610日）



和牛初生販売：現金化まで約2ヶ月（60日）



2年近く経費だけがかかり続けるのではなく、わずか2ヶ月で現金を生み出すサイクルを作れることは、経営の安定に直結します。

もちろん、ゲノム検査自体にも費用はかかります。しかし、私たちの試算によれば、経産牛100頭規模の牧場様がゲノム情報を活用し、牛群の能力向上と繁殖割合の変更（育成コスト削減・和牛導入）を行った場合、5年後には約1,700万円の利益創出が見込めます。この具体的な費用対効果（シミュレーション）については、「⑤ 費用対効果の考え方」の章で詳しく説明します。

重要なのは、この試算が、途中でかかるゲノム検査費用をすべて差し引いた上での「純粋な利益」であるという点です。

「費用」として捉えれば高く感じるかもしれませんが、それは将来の「利益」を生み出し、「無駄なコスト」を削減するための「未来への投資」です。これほど費用対効果の高い一手はないと私たちは考えます。



### ③ データとの付き合い方

キーワード: 見る・比べる・選ぶ

「いざ導入しても、データが難しくて使いこなせる自信がない」「指標が100種類以上もあると聞いた。どこをどう見ればいいんだ...」「結局、すべてのデータを分析しきれないのではないか？」そのご不安、当然です。100以上もある指標をすべて読み解いて分析することは、確かに簡単なことではありません。では、どの指標から見ればよいのでしょうか。

かつては乳量や体型など、特定の形質だけを重視する改良も行われてきました。しかし、それだけでは「乳は出るが病気が多い」「体型は良いが繁殖が悪い」といった能力の偏りが生じがちです。

そこで現在のゲノム検査における判断基準のトレンドは、「経済的な利益」を最大化するために、複数の形質をバランスさせた「総合指標」を用いることです。

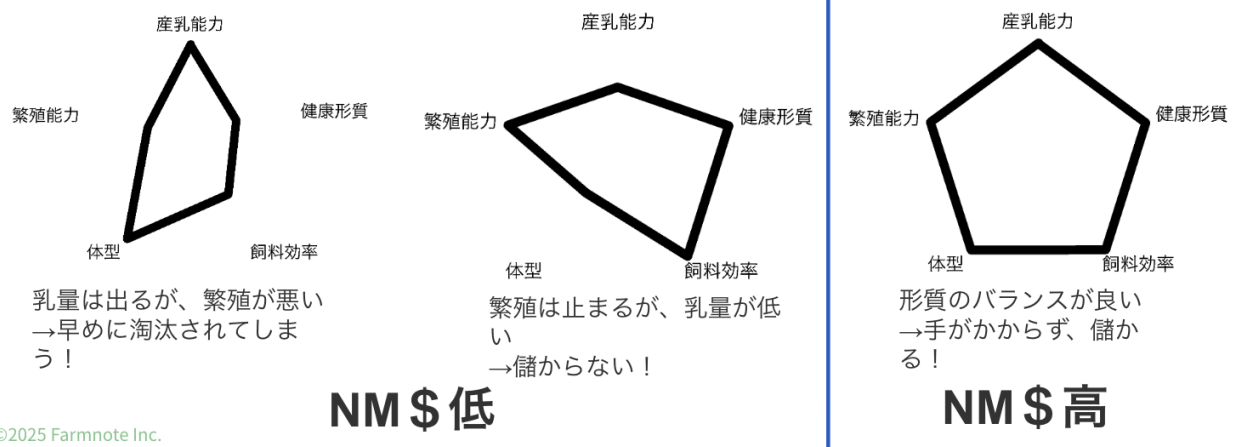
中でも、米国農務省(USDA)が開発した「NM\$(ネットメリット)」は、世界で最も信頼され、広く活用されている“ものさし”です。このハンドブックでは、このNM\$の有用性に着目し、ゲノム活用の第一歩としてNM\$を軸に考える方法を推奨しています。

【できるかも！】「データが難しくて使えない」を、「これなら自分でも“見て・比べて・選べそう”」に

ゲノムには100以上の指標がありますが、すべてを一度に覚える必要は全くありません。まずは「NM\$(ネットメリット)」※ という、いわば「総合評価」の点数にだけ注目してみてください。これは、乳量、繁殖、健康などを総合的に見て、“その牛が生涯でどれだけ牧場に利益をもたらすか”をドル換算で示した、非常に分かりやすい指標です。

1. まずは「見る」: あなたの“現場感覚”と比べてみましょう

この図をご覧ください。皆様の牧場にも、このような「悩ましい牛」がいませんか？



- 図の左側(NM\$ 低): 乳量はすごく出る(産乳能力が高い)けれど、繁殖が悪い牛。こうした牛は、手がかかる上に早くに淘汰されてしまう可能性があり、結果として「儲からない」ためNM\$は低くなります。
- 図の真ん中(NM\$ 低): 逆に、繁殖は止まるし健康だけれど、肝心の乳量が低い牛。これもやはり「儲からない」ため、NM\$は低くなります。

## 2. 次に「比べる」「選ぶ」: 牧場の未来のために

私たちが目指すのは、図の右側(NM\$ 高)の牛です。産乳能力、健康、繁殖、飼料効率、体型といった形質のバランスが良く、手がかからずに儲かる牛。これがNM\$の高い牛の姿です。

NM\$という総合点を軸に、その内訳(産乳能力、健康形質など)を比べることで、「うちの牧場の弱点は、繁殖能力だったのか」「乳量よりも、まずは健康な牛群を作ることを優先しよう」といった次の改良目標を明確に「選ぶ」ことができます。

牧場全体の平均NM\$を上げていくことが、儲かる牛群作りの基軸になります。まずはNM\$を「見て」、現状を「比べて」、未来の方針を「選ぶ」。ゲノムとの付き合い方は、このシンプルな3ステップから始まります。

## ※NM\$とは

米国農務省が策定した、雌牛の期待生涯利益を品種平均と比較して表したものです。NM\$は乳量、健康、寿命、分娩難易度に関連した経済関連形質を利用しており、具体的な形質は、乳脂肪と乳タンパク（したがって乳量も含まれる）、生産寿命、娘牛妊娠率、体細胞スコア、乳器、肢蹄、体型、分娩能力（死産情報を含む）です。

### 【当社の解釈：NM\$の「重みづけ」の意図】

NM\$が「総合評価」と呼ばれる理由は、各形質が経済的な重要度（儲けへのインパクト）に応じて『重みづけ』されている点にあります。

例えば、単に乳量が多い（乳脂肪・乳タンパク）だけではNM\$は最大になりません。なぜなら、乳量が多くても、病気がち（体細胞スコアが悪い）であったり、長生きできなければ（生産寿命が短い）、治療コストや牛の更新コストが利益を圧迫してしまうからです。

NM\$の重みづけは、こうした\*「売上（乳代）」と「コスト（治療費・更新費・飼料費など）」の経済バランスを自動で計算してくれる仕組みになっています。

つまりNM\$とは、「生涯を通じて、最も効率的に牧場に利益を残してくれる牛はどれか？」という経営者の視点に立った、極めて実践的な指標なのです。

## ④ 時間と手間の考え方

キーワード: 1回の検査が、一生の資産になる

「ゲノム検査が良いのは分かる。でも、忙しいのに新しいことを増やしたくない」  
「日々の搾乳や餌やり、治療に追われて、そんな余裕はどこにもない」そう思うのは当然です。

牧場運営の現場は、常に時間との戦いです。「ゲノム検査」と聞くと、何か特別な準備をしたり、専門知識を持つスタッフが付きっきりになったり...そんな「面倒」な作業をイメージされていないでしょうか。

しかし、もしその「一手間」が、ほんの少しの時間で終わり、その結果がその牛の一生涯にわたって活用できる経営資産になるとしたら、どうでしょう。

【できるかも！】「面倒で余裕がない」を、「これなら、ついでにできるかも」に

まず、検査作業そのものに、特別な時間や手間は一切かかりません。皆様が日常的に行っている、耳標を新しく装着する作業や、治療などで牛を捕まえる作業、その「ついで」で構いません。

専用の採取器具を使って、耳から米粒ほどの大きさの組織片を「パチン」と採取するだけ。あとは、そのサンプルを送付していただきます。日々の作業フローを、一切変える必要はありません。



専用の採取器具を使って、耳から組織片を採取する様子

「ゲノム検査のための時間」を、新しく確保する必要はないのです。

ここからが、最も重要なポイントです。検定成績や乳量はその時々で変動しますが、その牛が持つ遺伝的なポテンシャルは、一生変わりません。つまり、たった1回の検査で得られる遺伝情報は、その牛が牧場にいる限り、ずっと活用し続けられる「普遍的なデータ資産」となるのです。

例えば、

- 初回の授精時には、どの精液を交配すれば能力を最大化できるかの判断材料に。
- 育成期には、将来の乳量や体格を予測し、後継牛として残すべきかどうかの選抜基準に。
- 泌乳期には、遺伝的な疾病リスクを考慮した上で、重点的に管理すべき牛の特定に。

このように、一度取得したデータは、牛の成長ステージごとに、繰り返しあなたの判断を助ける強力な武器となります。

「面倒だ」と感じるその一手間は、将来の「もっと大きな面倒」を回避するための、最も簡単で効果的な先行投資です。病気がちで手のかかる牛、なかなか受胎せずに何度も授精が必要な牛。そういった牛を遺伝情報に基づいて計画的に減らしていくことは、未来のあなたの労働時間とコストを確実に削減します。

「面倒で後回しにしていた一手間」が、「一生使える経営資産」に変わる瞬間です。その「ついで」のほんの少しの作業が、あなたの牧場の未来を、より楽で、より儲かるものに変える最初の一步になるかもしれません。

## ⑤ 費用対効果の考え方

キーワード: 1頭の情報が、100頭分の未来を変える

「1頭数千円の検査費を、全頭にかけるのは現実的ではない」「数頭検査したところで、牧場全体の経営がどれだけ変わるのか、実感が湧かない」「元が取れるか不安だ。費用対効果が見えにくい」

その視点は、非常に重要です。②では「1頭」の育成コストを削減するという短期的な効果についてお話しました。しかし、ゲノム検査の本当の価値は、もっと長期的な「牧場全体の未来」を変える力にあります。まさに「1頭の情報が、100頭分の未来を変える」のです。

【できるかも！】「元が取れるか不安」を、「“群れ全体”の5年後の利益設計図になるかも」に

ゲノム検査の最大の費用対効果は、「牧場全体の平均能力」を底上げし、将来の収益を最大化できる点にあります。

1. 「1頭の情報」は、牧場全体の「羅針盤」になる

ゲノム検査は「その1頭を調べる」だけではありません。「1頭」のデータを集積し、「100頭」の牛群全体として分析することで、

- 「うちの牧場の遺伝的な強み・弱みは何か？」
- 「5年後、牛群をどういう状態にしたいか？」という、牧場経営の「羅針盤」を手に入れることができます。

「なんとなく改良する」のではなく、「この能力を伸ばす」という明確な設計図を持って、100頭の牛群改良に取り組むことができます。

2. 100頭の未来を変えた結果、1,700万円の利益に

「1頭の情報」に基づいた設計図で牛群改良を進めると、どうなるか。当社のお客様の事例(経産牛100頭規模)では、ゲノムを活用して以下の2点を実行しました。

1. 牛群全体の能力向上(NM\$の底上げ)

## 2. 繁殖計画の最適化(能力上位の牛から後継牛を確実に採る)

その結果、5年間の累計で約**1,700万円**の利益創出が可能というシミュレーション結果も出ています。

### 費用対効果について(経産牛頭数100頭の場合)

5年間概算費用	約300万円	個体売買想定利益	約1,200万円
初回ゲノム採材価格 約135万円 ・初産＋未経産 130頭 ・検査料及び採取器具費		・令和6年度北海道の家畜市場平均より試算 繁殖割合 ホルメス 43頭⇒37頭 ホルオス 20頭⇒3頭 F1メス 13頭⇒24頭 F1オス 17頭⇒24頭 和牛初生オス 0頭⇒5頭	
2年目以降の年間費用 約40万円/年 ・検査頭数40頭/年 検査料及び採取器具費 ・システム利用料及び定期レビュー		生乳成績想定利益	約840万円
		平均乳量 33.2Kg⇒34.2Kg ・5年後に平均個体乳量 1.0キロ増、乳脂率0.1%改善の場合	

5年間で累計

**利益 約1,700万円創出可能**

©2025 Farmnote Inc.

## ゲノム検査導入と5年間の費用対効果試算(当社調べ)

### 3. 検査費用は「未来の利益」からの逆算

1頭数千円の検査費用は、この「5年後の1,700万円」という未来の利益を生み出すための、いわば「設計図」への投資です。「1頭」のコストとして見るか、「100頭の未来」への投資として見るか。

「1頭の情報」は、その1頭のためだけのものではありません。牧場全体という「100頭分の未来」を設計し、群れ全体の利益を最大化するための、最も強力な経営情報なのです。



## ⑥ 指標の活かし方

キーワード: 目的に合わせて見る指標を選ぶ

「③でNM\$(総合評価)は分かった」「でも、乳量、繁殖、健康...結局、全部を追い求めないといけないのでは?」「100以上も指標があって、どれも大事に見えてきてしまう...」

どれを重要視したらいいか?



課題 1

乳量UP



課題 2

病気減



課題 3

受胎率UP

そのお気持ち、よく分かります。すべてを一度に完璧にしようとする、かえって何から手をつければ良いか分からなくなってしまいます。大切なのは、すべての指標を「追う」ことではなく、あなたの牧場の「目的」を決めることです。

【できるかも!】「全部を追うのは無理」を、「うちの牧場は“これ”を優先しよう」に変えられる

ゲノムは、あなたの牧場の「弱点」と「強み」を教えてくれるツールです。例えば、

- 「とにかく乳量を増やしたい」
- 「病気を減らして、治療コストや手間を削減したい」
- 「まずは受胎を安定させて、牛群の回転を良くしたい」

このように、牧場の経営方針に合う3~5項目の「最重要指標」を決めて、まずはそこに注視してみましょう。

無理にすべてを追う必要はありません。あなたの牧場にとって「今、一番改善したいこと」は何か。その目的に合わせて見る指標を絞り込むことで、ゲノムは“わかる”だけでなく、明日から使える情報になります。

## ⑦ 世代間の考え方

キーワード: つなぐ育種から、進化する育種へ

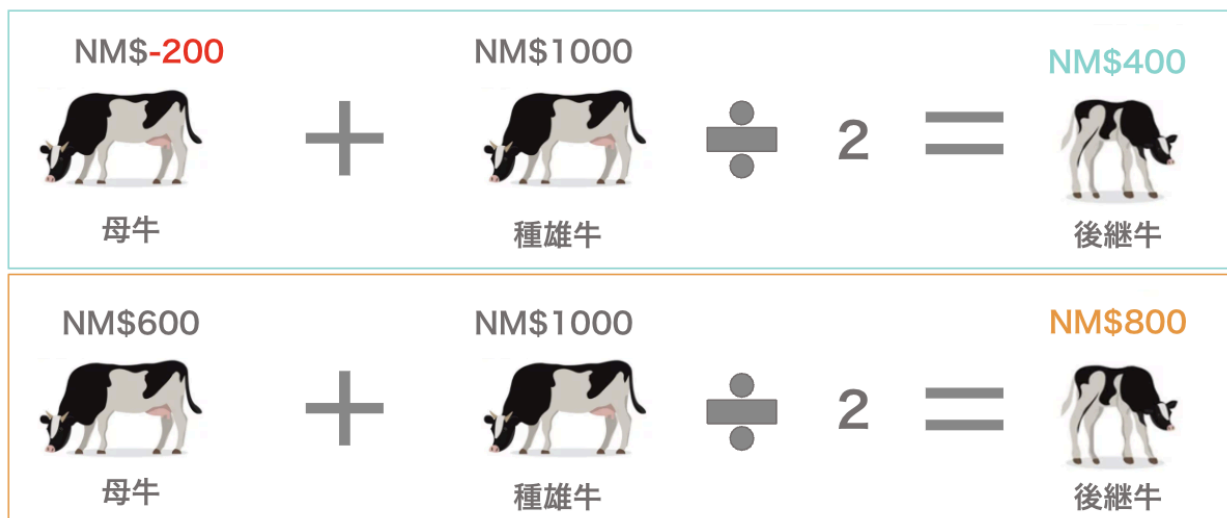
これまでの繁殖は、優秀な種雄牛を選び、その「血統をつなぐ」ことが中心でした。しかし、ゲノムはその常識を変え、「どんな遺伝を残したいか」を、母牛も含めて設計する」時代へと進化させました。

【できるかも！】「良い血を残す」から、「“儲かる遺伝”を残す」へ、親子で同じ設計図を持てる

なぜ、母牛が重要なのでしょうか。それは、生まれてくる子牛の遺伝能力(NM\$)は、「(母牛のNM\$ + 種雄牛のNM\$) ÷ 2」という、非常にシンプルな計算式でおおよそ予測できるからです。

もちろん遺伝にはバラツキがあるため、必ず計算通りになるわけではありません。しかし、期待値として、いくら優秀な種雄牛(精液)を使っても、選んだ母牛の遺伝能力(NM\$)が低ければ、子牛に期待できる能力の平均値も、それだけ下がってしまうのです。

参考: 子牛の遺伝能力の考え方



母牛のNM\$ + 種雄牛のNM\$ ÷ 2 = 生まれてくる子牛のNM\$  
牛群改良には**母牛のNM\$を正しく**把握することが重要！

これまでの「血統」という感覚的なものさしではなく、「NM\$」という客観的な数値で母牛の遺伝力を理解すること。それが、次世代の改良の要です。「良い血統をつなぐ」育種から、「儲かる遺伝を設計して残す」育種へ。ゲノムは、育種改良を新たな時代へと進めるためのツールとなります。

## ⑧ 牛群の健康管理

キーワード: 病気を「減らす経営」へ

「乳房炎や蹄の病気は、経営を圧迫する大きな課題だ...」「毎月の治療コストや薬剤費が、予想以上に利益を削っている」「病気の牛の対応に手間と時間が取られて、他の作業が進まない。この『治す』作業に追われる日々から、いつになったら抜け出せるんだろうか...」

そのように、日々の治療や管理に追われ、コストと労力という「目に見える痛み」に悩み続けている牧場主様は少なくありません。しかし、もしその病気が「遺伝的に“なりやすい”牛」に集中していたとしたら、どうでしょう。

【できるかも!】「病気を『治す』日々に追われる」のを、「『病気になりにくい牛群』を設計する」経営に変える

ゲノム検査では、乳量だけでなく、その牛が持つ「健康に関する遺伝的なリスク」も予測できます。

例えば、体細胞スコア(**SCS**)。ゲノム評価でSCSが高い(＝遺伝的に乳房炎リスクが高い)牛群は、実際の発生件数も多くなる傾向があります。逆に、SCSが低い(リスクが低い)群では、年間の発生件数がごくわずかにとどまった事例もあります。

他にも、乳房炎、子宮炎、蹄病といった“病気へのなりやすさ”を遺伝的に予測できる指標があります。

これらの指標を使って、「病気になりにくい牛」を後継牛として選抜し、「リスクの高い牛」には治療コストのかかる乳牛ではなく和牛受精卵を移植する。そうすることで、治療にかかる労力やコストを計画的に減らし、群全体の健康を守ることが可能です。

ゲノムは、病気を「治す」ためのツールではなく、「起こさない」ための経営設計ツールなのです。

## ⑨ 情報共有とチーム活用

キーワード: データが共通言語になる

家族経営・従業員・獣医師・授精師など、  
複数の人が関わる牧場では「情報の共有」が鍵です。

「データをもらっても、結局どう活かせばいいかわからない」「自分(社長)だけが分かっている、現場のスタッフや授精師さんにまで正確に共有できない」「結局、改良計画は事務所のPCの中。現場は日々の作業に追われて、計画通りになんて実行できない...」

そのご不安こそ、ゲノム検査の導入をためらう、最大の「できない理由」かもしれません。

ゲノム活用がうまくいかない最大の原因は、「計画」と、日々の「実行」が分断されてしまうことにあります。そして、その分断を生んでいるのが、まさに「情報共有の壁」です。

従来のゲノム検査サービスは、ゲノム「検査」し、分析結果の「数字を返す」ことがゴールでした。しかし、その数字を計画に活かし、チーム全員に浸透しなければ、宝の持ち腐れになってしまいます。

だからこそ、私たちファームノートは、ゲノムデータをチーム全員が迷わず使える「共通言語」に変え、牧場全体の実行力を高める「仕組み」をご提供します。

【できるかも!】「データを使いこなせない」を、「チーム全員で、迷わず実行できる」に

私たちが提供するの、単なる「分析結果」ではありません。牛群管理システムとゲノムデータを直結させた、「実行サポートツール」です。

具体的には、「計画」をシステムが自動化します。ゲノムデータに基づき、あなたの牧場で残すべき「後継牛」をシステムが自動で選抜します。

「情報共有」の手間をゼロにします。システムが「後継対象」として選抜した牛には、ファームノートの牛群管理画面上で、自動的に「後継対象」という青いう

ベルが付きます。社長がわざわざリストを作ったり、指示を出したりする必要はありません。

「実行」が誰でも迷わずできます。授精師さんや現場のスタッフが、授精の際にその牛の画面をスマホやタブレットで開けば、「あ、この牛は青ラベルの後継対象だ」「推奨精液はこれを使おう」という判断が、誰でも、一目で、その場ですぐに分かります。逆に、ラベルが付いていない牛には「和牛受精卵を移植しよう」といった判断も迷わずでき、経営効率が格段に上がります。

ゲノムデータという「共通言語」がシステムに組み込まれることで、社長が立てた高度な改良計画が、現場の隅々にまで浸透し、日々のオペレーションとして自動的に実行されていくのです。

「データを使いこなせないかも」という不安を、「これならチーム全員で同じ目標に向かえるかも」という期待感へ。私たちは、単なる「検査機関」ではなく、皆様のチーム力を最大化し、牧場運営を円滑にするパートナーでありたいと考えています。

## ⑩ 最初の一步

キーワード: 1頭から始める、自分の牧場の未来づくり

「①から⑨まで読んで、理屈は分かった」「でも、いきなり全頭で始めるのはリスクが大きいし、なかなか踏み出せない」「本当に自分の牧場でもうまくいくのか、確信が持てない...」

その慎重なご判断、とてもよく分かります。どんなに良い話でも、ご自身の牧場でどうなるかが見えなければ、大きな決断はできないものです。しかし、私たちは皆様に「いきなり全頭で始めましょう」とご提案したいわけではありません。

【できるかも！】「いきなりは無理」を、「まずは、この**10頭**からなら試せるかも」に

ゲノム検査は、決して「全頭一斉に」始める必要はありません。まずは、あなたの「目」で選んだ、気になる牛から試してみませんか？

例えば、

- あなたが最も期待している、次世代の後継牛候補の**10頭**
- ①で触れた、あなたの「勘」と答え合わせしてみたい牛
- ③の図にあったように、乳量が多いが繁殖が悪い「悩ましい」牛

### 1. まずは「体感」してみませんか？

たった数頭でも、検査をしてみることで、具体的な「体感」が得られます。「なるほど、うちのエース候補は、NM\$（総合評価）もやっぱり高かった！」「お、この牛は意外にも繁殖に弱点があったのか...」「Farmnoteのシステム上では、こんな風にデータ（青ポチ）が見えるのか」

### 2. それでも不安が残る場合は...

まずは数頭試してみる、という小さな一歩が大切ですが、それでもご不安な場合や、「そもそも、どの牛から試すべきか」「自牧場の課題をどう整理すればいいか」とお悩みの場合は、どうぞお気軽にご相談ください。



ファームノートでは、ゲノム活用の基礎から、あなたの牧場に合わせた活用法までを一緒に考える「個別勉強会」を随時開催しています。

「1頭」から得られる気づきが、あなたの牧場の未来を大きく変えるきっかけになるかもしれません。その第一歩を、私たちが全力でサポートします。

ゲノムを活かす酪農の第一歩  
「できない」を「できるかも」に変える 10 のヒント  
2025 年 10 月 第 1 刷発行

株式会社ファームノート  
〒080-0018 北海道帯広市西 8 条南 18 丁目 3-4  
<https://farmnote.jp/>